長崎・興善町遺跡（八尾宅跡）

1 所在地　長崎市興善町
2 調査期間　一九九一年（平3）一二月～一九九二年一月
3 発掘機関　長崎市教育委員会
4 調査担当者　永松　実
5 遺跡の種類　町屋跡
6 遺跡の年代　一四～一九世紀
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

興善町遺跡は長崎市中心部の官公庁街にあり、長崎市役所から県庁方向に伸びた標高約一一mの段丘上に立地している。元亀二年（一五七一）台地先端の県庁付近に、ポルトガルとの貿易のため、肥前のキリシタン大名大村純忠により六カ町がつくられた。その後、これらの町に接して文禄元年（一五九二）に新たに一七カ町が設けられた。興善町はこの時できた町の一つで、当初は新町と名付けられたが、一九六三年に興善町と町名変更された。

（長　崎）

興善町遺跡のこれまでの調査としては、一九九〇年に行なわれたビルの建設に伴うものがある。近世遺構として屋敷の礎石、地下室、井戸などを検出し、遺物としては陶磁器が多量に出土した。なかでも慶長元～寛永二〇年（一五九六～一六四三）ごろの中国景徳鎮窯系、福建・広東窯系の染付が多い。国産のものでは陶器は唐津焼が多く、備前の擂鉢などもある。なかでも注目されるのが茶陶である。志野・織部・楽の茶椀や向付、茶入がある。このほか朝鮮王朝の堅手茶椀、中国の古染付、安南赤絵、交趾の緑釉香合、東南アジアの印紋土器、中国の褐釉四耳壺など国内外の多彩な製品が出土している。また、長崎開港と共に布教されたキリスト教関係の遺物としてロザリオの玉やクルスが見つかっている。

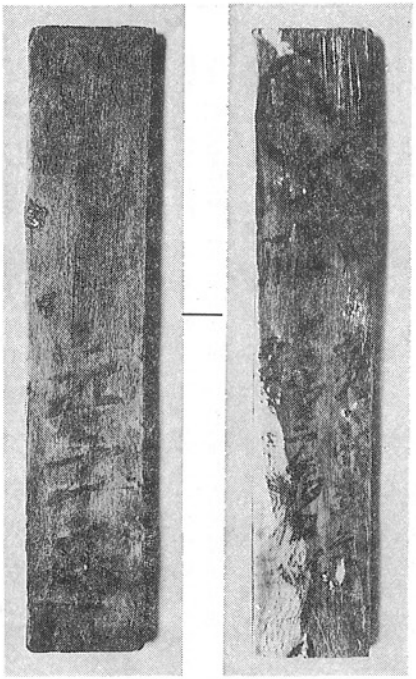
この地域は古文書などの調査から、八尾氏の屋敷跡と判明している。八尾氏の祖先は大坂八尾の出身と伝えられ、初め具足屋といい、元和四年（一六一八）具足屋源左衛門が、新町の乙名（地役人）を勤めて以来幕末まで世襲している。

今回報告する木簡の出土した調査区も八尾宅跡の一部で、前回同様ビル建設に伴う発掘調査である。遺構としては屋敷の礎石、柱穴、土坑を検出した。

木簡の出土した遺構は、発掘区の東壁にかかる東西二・五m×南北三・五m、深さ一mの不整楕円形の土坑である。内部から木簡のほかに櫛、下駄、朱漆塗椀、桶の木材、木片、陶磁器、動物遺存体などが出土した。

8　木簡の釈文・内容

「　　戊　寛永五年
(1)・㊅　壱番白糸三拾五斤
　　辰　霜月吉日　」
・「京□町
　　山地与十郎　」　　165×33×7　011



表の㊅は八尾氏の「八」を表すものと推測される。裏面の山地与十郎については定かでない。樹種は本州・四国に分布する常緑針葉高木であるヒノキ科のネズコである。

白糸の木簡としては、平安京左京内膳町跡から、慶長九年（一六〇四）に白糸六〇斤を長崎年寄中から京都の糸商松屋三郎右衛門に宛てたものが発見されており（『木簡研究』二）、今回のものはこれに次ぐものである。

今回白糸の木簡が宅地内から出土した八尾氏は糸割符仲間か、彼らと関係の深い人物であったと考えられる。そして、出土した茶陶と白糸の付札は、京都や堺との文化及び経済面での深い交流を物語っている。

（永松　実）